渡殿の戸口の紫の上

――「薄雲」巻における中将の君を介した歌をめぐって――

佐藤洋美

一　光源氏を見送る紫の上

『源氏物語』「薄雲」巻、光源氏は明石の君の住む大堰へ出掛けていく。それは、正月が過ぎて忙しさがひと段落した頃の訪れであった。身支度を調えた光源氏は、紫の上のもとに出立の挨拶をしに向かう。

山里のつれづれをも絶えず思しやれば、公私もの騒がしきほど過ぐして渡りたまふとて、常よりことにうち化粧じたまひて、桜の御直衣にえならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ装束きたまひて罷申ししたまふさま、隈なき夕日にいとどしくきよらに見えたまふを、女君ただならず見たてまつり送りたまふ。姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりて慕ひきこえたまふほどに、外にも出でたまひぬべければ、立ちとまりて、いとあはれと思したり。こしらへおきて、「明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

舟とむるをちかた人のなくはこそ明日かへりこむ夫と待ちみめ

いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

行きてみて明日もさね来むなかなかにをちかた人は心おくとも

何ごとも聞き分かで戯れ歩きたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、をちかた人のめざましさもこよなく思しゆるされにたり。

（「薄雲」②四三八～四三九頁）[1]

光源氏は「常よりことに」身支度を調え、香をたきしめた装束を身にまとっている。夕日に照らされていっそう輝くばかりに美し

い姿の光源氏を、紫の上は「ただならず」見送る。しかし、幼い明石の姫君が指貫の裾にまとわりついて後を追い、それは御簾の外にも出てしまいそうな勢いであったという。そのため、光源氏は姫君をなだめようと「明日帰り来む」と口ずさんでから出て行くが、その言葉を聞いた紫の上は、「渡殿の戸口」に「待ちかけ」て、光源氏の召人でもある紫の上の女房、中将の君を介して歌を詠みかけるのであった。

光源氏が発した「明日帰り来む」という言葉と、それを受けて詠まれた贈答歌は、古注釈以来、催馬楽「桜人」の詞章をふまえたものであることが指摘されてきた。「桜人」は夫婦の掛け合いの形を取るが、新編日本古典文学全集頭注では、光源氏が姫君に向けて言った「明日帰り来む」という言葉を、紫の上が「自分に対する源氏のあてこすりと解した」[2]ことで、「舟とむる」の歌が呼び込まれてくると指摘している。紫の上の歌を受けた光源氏は「行きてみて」の歌を返しているが、ここで注意したいのは、その歌が交わされた場所が「渡殿の戸口」であり、中将の君を介すという形をとっていることである。なぜ両者の歌の贈答は「渡殿の戸口」でおこなわれ、女房が媒介となったのであろうか。

当該場面における紫の上の心情については、斎藤暁子が紫の上は「姫だけは完全に奪いとったという勝利感、所有感」を抱いているとし、森野正弘が明石の姫君を「「罪」を無効化する」存在ととらえる[4]など、紫の上は、姫君の養母となったことで明石の君に対する嫉妬をおさめているとされてきた。また、倉田実は「桜人」の詞章が「遊戯的に使用されることによって諧謔性を顕著」にし、皮肉ぶりが大きく緩和されていると指摘して、余裕を持った紫の上の行動であるととらえている[5]。たしかに、紫の上は明石の姫君を引き取ったことによって、光源氏の妻として、姫君の母としての安定した地位を得たかのように見える。「薄雲」巻の当該場面においても、光源氏が出立したのち、無邪気にふるまう明石の姫君の様子を見た紫の上は、姫君を「うつくし」と思うからこそ「をちかた人のめざましさもこよなく思しゆるされてにたり」と、明石の君に対して感じる不快感も許す気になったという。

一方で、姫君を得てもなお明石の君に対して穏やかではいられない紫の上の心情を読み取る見方もある。新編日本古典文学全集頭注は、「常よりことにうち化粧じ」た光源氏を「ただならず」見送る紫の上の視線には明石の君に対する嫉妬が含まれると指摘する[6]。また、出て行こうとする光源氏に紫の上の方から歌を詠みかけることから、大内英範は「紫の上の焦燥」を読み取り[7]、玉上琢彌も紫の上が「心に動揺を来たし」たことによる行動であるととらえる[8]。こうした指摘をふまえれば、当該場面における歌の贈答

に込められた意味を明らかにすることは重要であろう。

当該場面において紫の上が光源氏に歌を詠みかけた時の状況は、「渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり」と記されるが、「渡殿の戸口」で光源氏を「待ちかけ」ていた人物については、紫の上自身とする見解[9]と中将の君とする見解[10]とがある。「待ちかけ」という語は、動詞「待つ」に補助動詞「かく」[11]が接続したものである。「待ちかけて」の部分には敬語が付属していないが[12]、下に続く「中将の君して聞こえたまへり」の「たまふ」で受ける形になっていると解することができよう[13]。つまり、当該場面では紫の上自身が「渡殿の戸口」にまで出て来たうえで、中将の君を介して光源氏に歌を詠みかけたと考えられるのである。

ではなぜ、紫の上は歌の贈答の場所として「渡殿の戸口」を選び、中将の君に媒介となることを求めたのであろうか。そうした不自然にも見えるふるまいについては、改めて問い直す必要がある。本稿では、歌が交わされた「渡殿の戸口」の位相をとらえ直したうえで、紫の上のふるまいと、中将の君の存在に注目することによって見えてくる明石の姫君を引き取った後の紫の上のあり方について検討したい。

二　「渡殿」の位相

はじめに、渡殿とはどのような場所であったかを考えてみたい。渡殿は、寝殿造の邸宅を構成する建物の一つであり、建築学と文学の両面から検証が重ねられてきた[14]。太田静六は、渡殿は「一般に寝殿と対屋などのように主要棟間を結ぶ」ものであるとし[15]、倉田実は、渡殿は寝殿と東西の対屋との間に南北に二条が渡され、北側が壁に囲まれた壁渡殿、南側が吹き放しで見通しがきく透渡殿であるものの、一条のみの邸宅や南側も壁渡殿であったと考えられる邸宅も見えると指摘する[16]。壁渡殿と透渡殿とでは大きく形態が異なるが、本稿では、古記録類や文学作品の記述から、渡殿がどのような場所として位置づけられていたかを検討する。

まずは、渡殿が通路として機能する例を見る。『栄花物語』においては、高陽院行啓の際に敦良親王が車を降りてから寝殿の御座につくまでの動きについて、次のように記されている。

西の廊のなかの妻戸より入らせたまひて、西の対の簀子より通りて、渡殿の簀子を渡らせたまひて、寝殿に南面より入らせたまひて、御座につかせたまひぬ。

（巻第二十三「こまくらべの行幸」②四一九～四二〇頁）[17]

敦良親王は「西の廊のなかの妻戸」から邸の中に入り、「西の対の

簀子」と「渡殿の簀子」を通って寝殿の南面に入って座についている。この例からは、渡殿が車を降りた敦良親王が寝殿に入るまでの通路の一つとなっていることが確認されよう。敦良親王が通った場所としては、ほかに「廊」と「簀子」があるが、とくに「廊」については、渡殿との区別が問題となってきた場所である。池浩三[18]は寝殿と対屋をつなぐ建物を渡殿、それ以外を廊と呼び、鈴木温子[19]や増田繁夫[20]も用途や形態から両者は別物であると指摘する。しかし、倉田実が両者をいかに区別するかについては明解を見ないと述べるように[21]、渡殿と廊は重なる機能を持つ場合がある[22]。たとえば、『源氏物語』では、六条院の町々の間には「塀ども廊などを、とかく行き通はして」造られ、秋好中宮の女童が紫の上に文を届ける折に「廊、渡殿の反橋」を渡ることが語られており（「少女」③八一～八二頁）、廊と渡殿は併記されることも多い。ここでは、渡殿と廊は共に「渡る」ための場所という性質を持ち、いったん外に出る形で、人々が行き来する場ととらえておきたい。

そのうえで注意したいのは、渡殿は、ひとつの殿舎としての機能も持つことである。『栄花物語』には、彰子の出産に備えて土御門邸に人々が参集したとき、「上達部、殿上人、さるべきはみな宿直がちにて、階の上、対の簀子、渡殿などにうたたねをしつつあかす」とあり（巻第八「はつはな」①三九九頁）、寝殿の中に入ることを許されない人々は、「階の上、対の簀子、渡殿」といった場所に控える。また、『源氏物語』においても、夕顔が物の怪に襲われた後、光源氏は「『渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ』」と右近に指示しており（「夕顔」①一六四頁）、渡殿は多く宿直の場となっていたと考えられる。

また、寛仁二年（一〇一八）十月二十二日の土御門行幸の饗宴が催された折には、『御堂関白記』に「渡殿対座敷畳、〔為脱力〕公卿座」とあり[23]、渡殿に公卿の座が設えられたことが記される。座の位置については、『小右記』の同日の記事に詳細な記述がある。

摂政并左右大臣已下参上着座、〈上達部座在二南庇西一二間一、対座、前太府円座敷二御簾下一、在二上達部奥座上一、〉大納言已上伺候、中納言已下在二渡殿一、〈寝殿与西対渡殿也、〉[24]

これによれば、大納言以上の座は寝殿の南廂に、中納言以下の公卿の座は寝殿と西の対とを繋ぐ渡殿にあった。天皇の座がある寝殿から渡殿にかけて、身分に応じて座の位置が決められていたのであるが、渡殿は寝殿に続く場所として、男性貴族たちが集う饗宴の場となったのである。さらに、『御堂関白記』長和五年（一〇一六）六月二日条には、土御門邸が里内裏となっていた頃に行われた一条院の新造による遷幸に伴う叙位について「宮司・家司・女方等叙位、於二東渡殿一以二経通一令二書出一、内大臣給レ之」と記

され[25]、叙位が寝殿と東の対とを繋ぐ渡殿で行われたことが確認できる。里内裏となる邸の寝殿は紫宸殿、対屋は清涼殿や後涼殿の役割を担っていたともいわれるが[26]、このときの土御門邸の渡殿は殿上の間の機能を果たしていたと指摘される[27]。

以上のように見てみると、渡殿は、建物の間を移動するための「渡る」ための場でありつつ、一方では、人々が集まりとどまることで宿直や饗宴の場となり、寝殿に付属する「殿舎」としても機能する多義的な空間であったといえる。そのうえ、渡殿と外部とのつながりをうかがわせる例もある。『御堂関白記』には「以二申時牛登二西対北渡殿一、所レ令レト、申二重由一、」と、土御門邸の渡殿に牛が侵入し、物忌みとなったことが記されている[28]。また、貴族の邸宅とは少々異なるものの、宮中においても「藤壺与梅壺間渡殿盗来」と藤壺と梅壺の間をつなぐ渡殿に盗人が侵入したとする記述も見える[29]。こうした侵入者たちの存在は、渡殿が異質な存在が入り込む余地を持ち、外部に開かれた場所であったことを示しているといえよう。つまり、渡殿は、寝殿や対屋に付属する邸の内部に続く空間でありながらも、限りなく外部に近い特異な場と位置づけられるのである。

「薄雲」巻の当該場面においては、邸の外部と内部を繋ぐ場所である渡殿の中でも「戸口」に焦点化され、女房を媒介にした歌の贈答が交わされている。続いては、渡殿の戸口における人々、とくに女房と男性たち動きに注目してみたい。

三　渡殿の戸口と女房

渡殿と女房との繋がりの深さを最も強く示すのは、渡殿に女房の局が置かれる例が見えることであろう。『紫式部日記』には、紫式部が「渡殿の戸口の局」から遣水払いをさせる道長を眺める様子が記されている（一二五頁）[30]。渡殿の構造や局の位置には諸説あるもの[31]の、紫式部が土御門邸の寝殿と東の対とを繋ぐ渡殿に局を賜っていたことは知られている。土御門邸の渡殿には、紫式部のほか、宰相の君や宮の内侍といった女房たちの局もあり、寝殿に近い方から身分に応じて局を賜っていたとも指摘されるが[32]、こうした女房たちは重用された人々であり、渡殿は邸の内部を差配する人々が伺候する場であった。また、『源氏物語』においては、光源氏が造営した二条東院について、「西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ」とあり（「松風」②三九七頁）、花散里の住む西の対と寝殿とを繋ぐ渡殿に政所や家司たちが置かれている。渡殿は家政を取り仕切る人々の集まる場として機能し、邸の内部とも深く関わる場所であったといえるのである。

そのような渡殿では、外からやってきた男性たちと女房とのやり取りが多く見える。『小右記』においては、藤原実資が彰子のもとに参上したとき、まずは渡殿に伺候したうえで、御簾の内にいた女房を介して彰子への啓上の機会を得たことが記される。その内容は「令レ啓二先日仰事之恐一〈参二御八講一事也、〉即伝二御消息一、又多故院御周忌畢事也」と記され[33]、御八講や一条院の法要といった公の行事に関わることであった。また、『紫式部日記』は中宮権亮藤原実成[34]と中宮大夫藤原斉信が渡殿の局を訪ねた時のことを次のように語る。

暮れて、月いとおもしろきに、宮の亮、女房にあひて、とりわきたるよろこびも啓せさせむとにやあらむ、妻戸のわたりも御湯殿のけはひに濡れ、人の音もせざりければ、この渡殿の東のつまなる宮の内侍の局に立ち寄りて、「ここにや」と案内したまふ。宰相は中の間に寄りて、まださぬ格子の上押し上げて、「おはすや」などあれど、出でぬに、大夫の「ここにや」とのたまふにさへ、聞きしのばむもことごとしきやうなれば、はかなきいらへなどす。

（『紫式部日記他』一六〇～一六一頁）

実成は「渡殿の東のつま」にある宮の内侍の局、紫式部のいる「中の間」に向けて声をかけ、斉信もそれに続く。ここで実成や斉信は、彰子に昇叙の御礼を啓上しようとしていたのであり、増田繁夫は、ただ取り次ぎの女房を探していたのではなく、「儀式的公的な取り次ぎ役」を求めていたことを指摘している[35]。こうした例からは、男性たちが女性に用件を伝える場合には渡殿に伺候する女房を通すという伝達の経路が見える。

また、『源氏物語』においても、明石の姫君の乳母[36]や女三の宮の女房[37]の局が渡殿に置かれている。光源氏は、女三の宮との結婚から五日目の朝、紫の上のもとで目を覚まし、女三の宮に文を遣わす。その際、「『西の渡殿より奉らせよ』と言って（「若菜上」④七一頁）、西の渡殿にいる女房たちを通して女三の宮に文を差し上げるようにと指示している。このときの文は「御筆などひきつくろひて」書かれたものとされ、新編日本古典文学全集頭注が「世間体もあり、なおざりにはできない」ために「念を入れて手紙を書いた」と指摘するが[38]、光源氏の文は、渡殿の女房を通すことによって正式なものとして女三の宮のもとへ届けられるのである。『紫式部日記』や『源氏物語』の例からは、男性が邸の中の女君への接触を求める折には、女房のはたらきが重要であったことがうかがえよう。とくに、形や体裁を気にした文などの取り次ぎの場合には、渡殿の女房が媒介となっていたのである。

さらに、外から来た男性が取り次ぎを求めるのではなく、邸の

中にいる女性のもとに入っていくためにも、女房やそれに準じる人々の手引きが必要であった。「空蟬」巻においては、光源氏が空蟬のもとに入る際に、紀伊守邸の「渡殿の戸口」[39]で小君の手引きを待ち（空蟬」①一二二頁）、柏木が小侍従の手引きによって女三の宮のもとに忍び込んだのも「渡殿の南の戸」であることが語られる（「若菜下」④二二七）。このように、外部からやって来た男性たちが渡殿の戸を開き、それを越えることによって日頃は接触できない女君との邂逅を図る様子が見えるのであるが、その折には、内側から手引きをする人々の存在がある。「渡殿の戸口」は、物理的に邸の内と外とを隔てる場所であり、その場にあって内と外を仲介している者こそが女房であったといえよう。

一方で、内に入ることのできない男性の場合には、渡殿で女房と交流する姿が見える。

御簾の内に入りたまひぬれば、中将、渡殿の戸口に人々のけはひするに寄りて、ものなど言ひ戯るれど、思ふことの筋々嘆かしくて、例よりもしめりてゐたまへり。

（「野分」③二七六頁）

光源氏が紫の上のもとを訪れた折、随行していた夕霧は御簾の外で待つが、そのとき、「渡殿の戸口」に女房たちの気配がしていたため、夕霧は側に寄って「ものなど言ひ戯」れる。夕霧は、これより前に「東の渡殿の小障子の上」から「妻戸の開きたる隙」を何気なく見た折に紫の上の姿を垣間見ており（「野分」③二六四頁）、その後も紫の上の姿が忘れられずにいる。しかしながら、紫の上の姿を垣間見たことや思慕の情は打ち明けられるはずもなく、ここで女房たちと「ものなど言ひ戯」れてはみるものの、心は沈んだままであった。

同じように、薫は、女一の宮が六条院の「西の渡殿」を御八講の後の仮の居所としていたとき、「障子の細く開きたる」ところから女一の宮の姿を垣間見ている（「蜻蛉」⑥二四七～二四八頁）。その後も「渡殿も慰めに見むかし」と思い（「蜻蛉」⑥二五五頁）、女一の宮への思慕の情を慰めるために渡殿に通い詰めるが、ふたたび女一の宮の姿を見ることはかなわない。そのようなとき、渡殿に集う女一の宮の女房と交流する。

例の、西の渡殿を、ありしにならひて、わざとおはしたるもあやし。姫宮、夜はあなたに渡らせたまひければ、人々月見るとて、この渡殿にうちとけて物語するほどなりけり。箏の琴いとなつかしう弾きすさむ爪音をかしう聞こゆ。思ひかけぬに寄りおはして、「など、かくねたまし顔に掻き鳴らしたまふ」とのたまふに、みなおどろかるべかめれど、すこしあげたる簾うちおろしなどもせず、起き上がりて、「似るべき兄や

ははべるべき」と答ふる声、中将のおもととか言ひつるなりけり。

（「蜻蛉」⑥二七一頁）

薫は、いつものように渡殿を訪れ、「渡殿にうちとけて物語する」女一の宮づきの女房たちと交流する。薫と女一の宮の女房、中将のおもとのやり取りには『遊仙窟』の引用が指摘され、「琴の音を聞かせて気をもますだけではなく、目にもその姿かたちを見せてほしい」との意を響かせる薫に対して、中将のおもとがそれを切り返しているという。[40] 薫は女一の宮に対する思慕の情を抱いて渡殿に通いつつ、薫の思いを知る女房と渡殿で戯れのやり取りを交わし、それを慰めとするのである。

渡殿は、時に外から来た男性と邸の内部の女性との間に恋を生み出す隙間を持つ。しかし、夕霧や薫はそれ以上女君のもとに近づくことはできず、また、女房に内部への取り次ぎを求めるわけでもない。そのような男性が「渡殿の戸口」にとどまって女房と交流することで、そこでは「戯れ」の歌が交わされ、男性と女房による擬似的な恋の場が生成されるのである。こうして見てみると、本稿が問題とする「薄雲」巻の当該場面において、光源氏と紫の上が直接歌を交わすのではなく、女房、しかも召人である中将の君と光源氏が歌を交わすかのように描かれていることも納得されてくる。しかし、その贈答のときには、紫の上が渡殿の戸口で光源氏を「待ちかけ」ているのであるが、そのふるまいはどのように理解すればよいのであろうか。

四　光源氏を見送る人々と歌の贈答

光源氏が明石の君のもとへ出立しようとしたとき、紫の上は御簾の内で一度は光源氏の姿を見送り、そこから光源氏を追うように「渡殿の戸口」に出て来ている。しかし、本来、外まで出て男性を見送るのは女房の役割であった。たとえば、光源氏が六条御息所のもとから帰るときには、女房の中将の君見送りをする。

廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。（中略）見返りたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪の下り端めざましくもと見たまふ。

「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔

いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと馴れて、とく、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる

と公事にぞ聞こえなす。

（「夕顔」①一四七～一四八頁）

中将の君は、「廊の方」に出た光源氏のお供をして見送る。その後、

光源氏が中将の君の手をとらえて歌を詠みかけたことで両者は歌を贈答するが、中将の君は「いと馴れ」た様子で応えつつ、「公事にぞ聞こえな」しており、主人の代わりに対応するという形をとるのである。中将の君の「いと馴れ」た様子からは、日頃から中将の君が光源氏とやり取りを交わしていたことがうかがえよう。また、朧月夜の場合にも「中納言の君、見たてまつり送るとて、妻戸押し開けたる」ことが語られ（「若菜上」④八三頁）、女三の宮の場合にも近くに控えていた乳母たちが「妻戸押し開けて」見送るのであった（「若菜上」④六九頁）。倉田実が妻戸は女房による見送りの場所となり、妻戸を出ることは邸を出ることと同じであると指摘するように[41]、高貴な女性たちの場合には、女性たちが自ら出て行くのではなく、邸を出るその間際まで女房が見送ることが通例であったと考えられる。

しかし、ここで注意したいのは、明石の君の場合である。桂の院と嵯峨野の御堂の造成を口実に光源氏が大堰の明石の君を訪れたとき、帰京するために邸を去ろうとする光源氏を見送るのは明石の姫君の乳母であった。その場面では、「戸口に、乳母若君抱きてさし出でたり」とあり、乳母は明石の姫君を抱いて「戸口」まで出て来るが、明石の君は籠もったままであり、そのような様子を光源氏は「あまり上衆めかし」と評している（「松風」②四一五～四一六頁）。光源氏の発言からは、自ら出て来ることなく女房に見送らせるのは高貴な女性の場合であるとの意識がうかがえ、明石の君の置かれた立場をみることができよう。この後、明石の君は女房たちにうながされて「しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れ」た状態で光源氏を見送ることとなる（「松風」②四一六頁）が、外まで出て来ることはない。しかしながら、「薄雲」巻に至り、姫君との別れの場面では明石の君が自ら姿を見せる。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて「乗りたまへ」と引くもいみじうおぼえて、

　　末遠き二葉の松にひきわかれいつか木高きかげを見るべき

えも言ひやらずいみじう泣けば、さりや、あな苦しと思して、

「生ひそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をならべん

のどかにを」と慰めたまふ。（「薄雲」②四三三～四三四頁）

明石の姫君が車に乗る間際、明石の君は自ら姫君を抱いて車を「寄せたる所」に出る。新編日本古典文学全集頭注では簀子まで出て来るのは異例であると指摘されるが[42]、明石の君は、通常は出ない

場所まで姿を見せ、姫君との別れを惜しむ。また、この場面では、明石の君の方から光源氏に歌を詠みかけている。女性から詠む歌については、はやく鈴木一雄が「作中男女間、特に女性側の感情・要求・意志に、何か常態とちがった緊張、微妙ではあるが特別な表現効果がこめられている」と述べ、明石の君の場合には、「子として、妻として、母としての苦悩からの、やむにやまれぬ光源氏への贈歌が多い」と指摘する。[43] 明石の君は、明石の姫君との別れの場面において簀子にまで出て来たうえ、自ら歌を詠みかけるという行動を取っており、そのふるまいによって激しく揺れ動く明石の君の心情が浮き彫りになるのである。

一方で、「薄雲」巻で光源氏が大堰に出立する場面においては、紫の上が御簾の内で「ただならず見たてまつり送りたまふ」と一度見送った後に「渡殿の戸口」に姿を見せ、紫の上の方から歌を詠みかける。このふるまいは、明石の君の場合と同様に、極めて異例な状況であったといえる。この場面において紫の上がそのような行動を取ったのは、光源氏が口にした「明日帰り来む」という一言がきっかけであったと考えられる。それでは、催馬楽「桜人」の詞章をふまえた「薄雲」巻の歌の贈答の描写について、「渡殿の戸口」という場所と合わせて考えてみたい。

五　催馬楽「桜人」と渡殿の戸口

紫の上は、催馬楽「桜人」の詞章をふまえた「明日帰り来む」という光源氏の言葉に応えるために「渡殿の戸口」に姿を見せ、自ら歌を詠みかける。催馬楽「桜人」は、夫婦の掛け合いの形をとる。

桜人　その舟止め　島つ田を　十町つくれる　見て帰り来むや　そよや　明日帰り来む　そよや
言をこそ　明日とも言はめ　彼方に　妻去る夫は　明日も真来じや　そよや　さ明日も真来じや　そよや

（新編日本古典文学全集『催馬楽他』一三九頁）

夫が島に十町作ってある田を見て明日帰って来ようと言うのに対して、妻は向こうにほかの妻がいるのだから帰って来るはずはないと恨み言で返す。光源氏と紫の上との間でも、「桜人」の詞章をふまえて、明石の君をめぐるやり取りが交わされるのである。大堰から「明日帰り来む」と言って明石の姫君をなだめようとする光源氏に対して、紫の上は、「舟とむるをちかた人のなくはこそ明日かへりこむ夫と待ちみめ」と詠み（「薄雲」②四三九頁）、大堰には光源氏を引き止める「をちかた人」たる明石の君がいるのだから、明日帰ってくるなど口先だけだと切り返す。それを受けて

光源氏は、「行きてみて明日もさね来むなかなかにをちかた人は心おくとも」と（同頁）、「をちかた人」が心をとどめたとしても、本当に明日帰って来ようと重ねているのである。

従来、このやり取りについては、浅野建二がこの歌の本意は嫉妬深い女性心理を叙する点にあるとしつつも、機知を中心とする唱和に改めることによって「をかしみ」が醸成されていると論じ、[44]「明日もさね来む」と詠む光源氏の歌については『玉の小櫛補遺』で「是はことさらにたはふれてかくよみ給へるなり」[45]とされるなど、「戯れ」の色が強いものであるとされてきた。しかしながら、はたしてたんなる「戯れ」の贈答ととらえてよいのであろうか。

『源氏物語』における催馬楽について、植田恭代は、恋愛に関する曲や異なる共同体に属す男女の出会いの場となった歌垣に由来する男女の掛け合いの詞章を持つ曲が多く用いられていることを指摘している。[46]その中で、催馬楽「竹河」に歌垣的性格を読み取り、催馬楽の詞章と「竹河」巻の物語世界との関係性を論じている。[47]「竹河」巻の男踏歌の場面では「竹河うたひて、御階のもとに踏み寄るほど、過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出でられければ」とあり（「竹河」⑤九七頁）、「御階のもと」という場所で催馬楽「竹河」が歌われるが、植田は「階」が境界性を持つ場であることを指摘し、催馬楽の詞章を重ね合わせることによって薫と玉鬘の娘の大君との「一線を画す恋の演出に奉仕している」と述べる。[48]つまり、催馬楽の詞章が『源氏物語』の場面描写と響き合うことで物語世界を形作っているのである。また、「竹河」巻では、男踏歌が終わった後、薫が「渡殿の戸口」で女房と歌のやり取りをする。

渡殿の戸口にしばしゐて、声聞き知りたりける人にものなどのたまふ。（中略）「闇はあやなきを、月映えはいますこし心ことなりとさだめきこえし」などすかして、内より、

竹河のその夜のことは思ひ出づやしのぶばかりのふしはなけれど

と言ふ。はかなきことなれど涙ぐまるるも、げにいと浅くはおぼえぬことなりけりと、みづから思ひ知らる。

流れてのたのめむなしき竹河に世はうきものと思ひ知りにき　（「竹河」⑤九八頁）

薫は大君の居所に行く冷泉院に同行し、「渡殿の戸口」で「声聞き知りたりける」女房と歌を交わす。その歌は、催馬楽「竹河」を歌ったときのことを思い出して「竹河」の語を詠み込みつつ、大君に心を寄せる薫の心情を詠んだものである。先に述べたように、「渡殿の戸口」は邸の外と内とを隔て、出入りする男性と女房との間で「戯れ」のやり取りが交わされる擬似的な恋の場が生成される場所であった。そのような場所で歌垣歌謡の趣が強い催馬楽の

詞章を意識した歌を詠み合うことは、むしろ自然なことであるといえよう。

「薄雲」巻の紫の上と光源氏の贈答で意識される催馬楽「桜人」は、外に出かけていく夫を見送る妻の皮肉が歌われる歌謡である。「桜人」では夫が田を見に行くと言うが、これまで光源氏が大堰を訪れる際には、紫の上に「桂に見るべきことはべる」「嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御とぶらひすべければ、二三日ははべりなん」と伝え（「松風」②四〇九頁）、「嵯峨野の御堂の念仏など持ち出でて、月に二度ばかりの御契り」と語られるように（「松風」②四二四頁）、桂院や嵯峨野の御堂にかこつけた外出とされてきた。しかし、「薄雲」巻の当該場面においては「常よりことにうち化粧じ」てめかしこんで出かけるのであり、これまでのように他の用事を言い訳にすることもなく、明石の君に会うためであることが明らかな外出であった。そうした光源氏を「ただならず見たてまつり送」る紫の上の姿からは、強い嫉妬を抱えていたことがうかがえよう。そうした場面において詠まれた紫の上の歌には、たんなる「戯れ」にとどまらない思いを読み取ることができる。紫の上の「舟とむる」の歌は、催馬楽「桜人」をふまえた「戯れ」の形をとりながら、皮肉を含んだ歌として詠まれたといえるのである。

そして、紫の上と光源氏の歌は、邸の外と内を隔てる場所である「渡殿の戸口」で贈答されている。明石の君のもとに出かけていく光源氏に対して、紫の上が「夫を待ちみめ」と夫を待つ妻として「渡殿の戸口」に「待ちかけ」つつ、まさに邸の外に出ようとするときに歌を詠みかけるのは、外出しようとする夫に対して皮肉を言った催馬楽「桜人」の詞章世界を具現化したものであったと考えられる。言い換えれば、催馬楽「桜人」の詞章世界を表現するためには、両者の歌の贈答の場所は「渡殿の戸口」でなければならなかったのである。

ただし、紫の上の「舟とむる」の歌は紫の上自身が直接光源氏に詠みかけたのではなく、中将の君を媒介としたものであった。この場面において召人たる中将の君が果たす役割とはどのようなものだったのだろうか。

六　中将の君存在と紫の上の立場

『源氏物語』において光源氏と紫の上が歌を贈答するとき、幼少期の北山の尼君による代作を除いて、第三者が間に入るのは「薄雲」巻の歌の贈答のみである。倉田実は、「薄雲」巻の贈答で中将の君が紫の上にかわって歌を詠みかけ、両者の歌が中将の君をはじめとする周囲の女房に「開かれた贈答歌」として享受されるこ

とは、紫の上に光源氏の妻としての安定した立場と心の余裕があることを示すと論じている。[49] しかし、光源氏が「明日帰り来む」という一言を発した後、紫の上の方から歌を贈っていることは見過ごせない。鈴木一雄が紫の上の方から贈歌するのは「光源氏の生涯の伴侶としての彼女の立場が不安定になったとき」であるとし、そうして詠まれた歌を「紫上の生涯の危機における和歌」と位置づけているように、[50] 自分の側から詠む歌で応えた紫の上の心情は決して穏やかではなく、むしろ明石の君への嫉妬を抑えきれずに動いた姿といえるのである。

そして、「薄雲」巻で歌の贈答の媒介となる女房が、ほかの女房ではなく、光源氏の召人である中将の君であったことは重要であろう。召人に関しては、阿部秋生の「自分の仕へてゐる主人又は主人格の男性と肉体関係をもつてゐる女房のこと」とする定義[51]をもとに多くの研究が重ねられてきた。三田村雅子は、女君の代理視点となる召人の視点に注目して、光源氏の召人たちが紫の上に代わって苦悩を伝える存在であることを指摘し、[52] 武者小路辰子は、紫の上が光源氏に対して不満を抱く時にこそ、召人たちの不満も物語に現れてくると論じる。[53]「薄雲」巻の歌の贈答の媒介となるのは中将の君という女房であり、もとは光源氏の召人で、須磨流謫にともなって紫の上の女房として仕えるようになった人物であった。玉上琢彌は「中将の君と紫の上とは一心同体なのである」と述べ、[54] 諸井彩子は、「薄雲」巻の当該場面に「明石の君に対して心穏やかではいられない紫の上と、その代弁者としての中将の君という関係」を読み取っている。[55]「舟とむる」の歌は紫の上が詠んだ歌ではあるが、中将の君を介して光源氏に伝えることによって、あくまでも召人が光源氏に詠みかけた歌という形をとることができる。つまり、紫の上は、中将の君を媒介とすることによって、二条院の女主人たる紫の上が大堰にいる明石の君に嫉妬するのではなく、召人たる中将の君が明石の君に嫉妬しているという体を装っているのである。そうした場における中将の君の対応は「いたう馴れ」たものであり、光源氏もまた「いとにほひやかにほほ笑」んで応じる（「薄雲」②四三九頁）。光源氏の「ほほ笑み」は、中将の君に対するものであると同時に、明石の君への嫉妬を抱きながらも、自らの立場をよく意識した行動をとった紫の上に向けられたものでもあった。

紫の上は、「渡殿の戸口」に「待ちかけ」て歌を詠みかけるという状況を作ることで催馬楽「桜人」の詞章世界を表すことを意図し、「戯れ」の形をとって本心を押し隠す。さらには、自ら光源氏に歌を詠みかけず、召人たる中将の君に詠ませることで、明石の君に対して直接嫉妬を示すことを避けている。そうしたふるまい

は、紫の上が嫉妬を抱きながらも明石の君との均衡を図りつつ、光源氏の妻であり二条院の女主人としての自らの立場を保とうとするものであったといえるのである。

そして、光源氏が出立した後の紫の上の様子については次のように記される。

いかに思ひおこすらむ、我にていみじう恋しかりぬべきさまをとうちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れゐたまへる御さま、見どころ多かり。御前なる人々は、「などか同じくは」「いでや」など語らひあへり。

（「薄雲」②四三九～四四〇頁）

紫の上は明石の姫君をいとおしく思い、自らの懐に入れて「御乳をくくめ」させており、その様子は「見どころ多かり」と評されている。しかし、紫の上が出ない乳を含めさせるその行動は「戯れゐたまへる御さま」とされ、あくまでも「戯れ」にしか過ぎないのである。女房たちは一見すると紫の上を褒めているかのようにも見えるが、「などか同じくは」「いでや」などと語り合っており、そこには紫の上と光源氏との間に実の子がないことが強く意識されているであろう。「薄雲」巻の当該場面においては、理想的な妻としての紫の上の姿が示されながらも、それをなんとか取り繕おうとする不安定な紫の上のあり方が照らし出されているのである。

注

（1）『源氏物語』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『源氏物語』により、巻名、冊数、頁数を付す。また、私に傍線等を付す。以下、同じ。

（2）新編日本古典文学全集『源氏物語』「薄雲」②四三九頁、頭注。

（3）斎藤暁子「紫上の嫉妬―対明石の場合―」『源氏物語の研究―光源氏の宿痾―』教育出版センター、一九七九年一二月、一三五頁（初出：一九七三年二月・六月）。

（4）森野正弘「化粧する光源氏／目馴れる紫の上」『源氏物語の音楽と時間』新典社、二〇一四年九月、三六六頁（初出：一九九七年三月）。

（5）倉田実「明石の君物語との交渉」『紫の上造型論』新典社、一九八八年六月、一四三頁（初出：一九八五年三月）。

（6）新編日本古典文学全集『源氏物語』「薄雲」②四三八頁、頭注。

（7）大内英範「女からの贈歌」『源氏物語の鑑賞と基礎知識№33 薄雲』至文堂、二〇〇四年四月、四七頁。

（8）玉上琢彌『源氏物語評釈』第三巻「薄雲」一七一頁、鑑賞。

（9）日本古典文学全集『源氏物語』（「薄雲」②四二九頁、現代語訳）、新日本古典文学大系『源氏物語』（「薄雲」②二二五頁、脚注）、新編日本古典文学全集『源氏物語』（「薄雲」②四三九頁、現代語訳）。

（10）吉澤義則『對校源氏物語新釋』（第二巻「薄雲」二四二頁）、日本古典文学大系『源氏物語』（「薄雲」②二二四頁、頭注）、玉上琢彌『源氏物語評釈』（第三巻「薄雲」一七一頁、鑑賞）。

（11）補助動詞「かく」は「他に向けて動作を及ぼす」という意味を持つとされる（我妻多賀子「かく【掛く・懸く】」大野晋編『古典基礎語辞典』角川学芸出版、二〇一一年一〇月、三二七頁）。

(12)「渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり」と記された部分は、池田亀鑑編著『源氏物語大成』（校異篇）や伊井春樹他編『源氏物語別本集成』によれば、伝為氏筆本が「まちかけたてまつりて」とする以外に異同はない。ただし、『源氏物語玉の小櫛』は「かはうの誤なるべし、待かけてといふは、俗言也、」として「待ちうけて」と解するのが適当であるとする（『本居宣長全集 第四巻』「源氏物語玉の小櫛 七巻 薄雲」筑摩書房、一九六九年一〇月、四二五頁）。

(13)「聞こえたまへり」については「きこえ」は源氏に対する、「たまへり」は紫の上に対する敬語である」とされる（玉上琢彌『源氏物語評釈』第三巻「薄雲」一七一頁、鑑賞）。

(14) 太田静六『寝殿造の研究』（吉川弘文館、一九八七年二月）、池浩三『源氏物語―その住まいの世界』（中央公論美術出版、二〇〇三年一〇月）、井上充夫「廊について―日本建築の空間的発展における一契機―」（『日本建築学会論文報告集』五四、一九五六年一〇月）、野地修左他「平安時代後期における渡殿と「廊」の用について」（『日本建築学会論文報告集』六〇、一九五八年一〇月）、高木真人他「古典文学にみられる廊的空間に関する研究 廊・渡殿・縁における行為を中心として」（『日本建築学会計画系論文集』五一四、一九九八年一二月）、池浩三・倉田実「対談『源氏物語』の建築をどう読むか」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識№17　空蟬』至文堂、二〇〇一年六月）など。

(15) 太田静六「平安末期における寝殿造の総括」『寝殿造の研究』吉川弘文館、一九八七年二月、五二四頁。

(16) 倉田実「渡殿・廊・中門廊」『王朝文学文化歴史大事典』笠間書院、二〇一一年一一月。

(17)『栄花物語』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集『栄花物語』により、巻数、巻名、冊数、頁数を付す。以下、同じ。

(18) 池浩三・倉田実「対談『源氏物語』の建築をどう読むか」『源氏物語の鑑賞と基礎知識№17　空蟬』至文堂、二〇〇一年六月。

(19) 鈴木温子「「廊の戸」からの覗き見―『源氏物語』の「廊」考―」『駒澤國文』四二、二〇〇五年二月。

(20) 増田繁夫「寝殿造における寝殿・対の屋以外の建築物」倉田実編『平安文学と隣接諸学1 王朝文学と建築・庭園』竹林舎、二〇〇七年五月。

(21) 注（16）に同じ。

(22) 渡殿と廊の区別については、注（14）、（19）、（20）の諸説に加え、平山育男「寝殿造の構造⑩廊―渡殿とはどう違うのか―」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識№17 空蟬』至文堂、二〇〇一年六月）、水田ひろみ「平安文学における渡殿の役割―恋愛発生の場として―」（『国文論叢』四〇、二〇〇八年三月）などに詳しい。

(23) 大日本古記録『御堂関白記』（下）寛仁二年（一〇一八）十月二十二日条、一八三頁。

(24) 大日本古記録『小右記』（五）寛仁二年（一〇一八）十月二十二日条、五九～六〇頁。＜ ＞は割注を示す。また、私に返り点を施し、表記を改めた箇所がある。以下、同じ。

(25) 大日本古記録『御堂関白記』（下）長和五年（一〇一六）六月二日条、六四頁。

(26) 池浩三「平安京の実態」『源氏物語―その住まいの世界―』中央公論美術出版、二〇〇三年一〇月（初出：一九八九年九月）。

(27) 山中裕編『御堂関白記全註釈』長和五年（一〇一六）六月二日条、二三三頁。

(28) 大日本古記録『御堂関白記』（上）寛弘二年（一〇〇五）七月二十一日条、一五四頁。
(29) 大日本古記録『御堂関白記』（中）長和二年（一〇一三）十二月九日条、二五五頁。
(30) 『紫式部日記』の引用は小学館刊新編日本古典文学全集『紫式部日記他』により、頁数を付す。以下、同じ。
(31) 土御門邸の渡殿の構造については、角田文衛「土御門殿と紫式部」（『紫式部伝―その生涯と『源氏物語』』法蔵館、二〇〇七年一月）に指摘がある。また、紫式部の局の位置については、安藤重和「「渡殿の戸口の局」の位置をめぐって―紫式部日記試論―」（『国語国文学報』五三、一九七九年三月）に詳しい。
(32) 増田繁夫「紫式部伝研究の現在―渡殿の局、女房としての身分・序列・職階―」増田繁夫他編『源氏物語研究集成 第十五巻 源氏物語と紫式部』風間書房、二〇〇一年一一月。
(33) 大日本古記録『小右記』（三）長和元年（一〇一二）五月二十八日条、二九～三〇頁。
(34) 本文中の「宮の亮」と「宰相」については、「宮の亮」と「宰相」を別人であるとする諸説もあるが、本稿では「同じ実成を、初めには「宮の亮」といい、後には「宰相」と、単に呼び分けたにすぎない」（萩谷朴『紫式部日記全注釈』上巻、角川書店、一九七一年一一月、四四一頁）とする指摘に従う。
(35) 注（32）に同じ、二七六頁。
(36) 明石の姫君が二条院に引き取られた折に、「乳母の局には、西の渡殿の北に当たれるをせさせたまへり」と語られ（「薄雲」②四三五頁）、寝殿と西の対をつなぐ渡殿に乳母の局がある。
(37) 女三の宮の六条院降嫁にともなって、「そなたの一二の対、渡殿かけて、女房の局々まで、こまかにしつらひ磨かせたまへり」とあり（「若菜上」④六二頁）、女房の局が渡殿に設けられたことがわかる。
(38) 新編日本古典文学全集『源氏物語』「若菜上」④七一頁、頭注。
(39) 紀伊守邸の渡殿や「渡殿の戸口」については諸説ある。池浩三・倉田実「対談『源氏物語』の建築をどう読むか」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識№17 空蝉』至文堂、二〇〇一年六月）、平山育男「「中川わたりなる家」復元考」（同上）、倉田実「『源氏物語』の「渡殿」考―南渡殿も壁渡殿であったか―」（『大妻国文』四〇、二〇〇九年三月）など。
(40) 新編日本古典文学全集『源氏物語』「蜻蛉」⑥二七一頁、頭注。
(41) 倉田実「『源氏物語』の「妻戸」考―寝殿造の出入口―」『大妻女子大学紀要（文系）』四三、二〇一一年三月。
(42) 新編日本古典文学全集『源氏物語』「薄雲」②四三四頁、頭注。
(43) 鈴木一雄「日記文学における和歌（その2）―女からの贈歌―」『王朝女流日記論考』至文堂、一九九三年一〇月、七九・八四頁（初出：一九六八年五月）。
(44) 浅野建二「源氏物語と催馬楽」『国語と国文学』二九―九、一九五二年九月。
(45) 沼尻利通「（翻刻）国立国会図書館蔵『玉の小櫛補遺』」『國學院大學大学院文学研究科論集』三一、二〇〇四年三月。
(46) 植田恭代「歌謡をどのように取り入れているか」（『源氏物語講座 第六巻 語り・表現・ことば』勉誠社、一九九二年八月）、「物語世界の催馬楽」（『源氏物語の宮廷文化―後宮・雅楽・物語世界』笠間書院、二〇〇九年二月）をはじめとする諸説に詳しい。
(47) 植田恭代「「竹河」と薫の物語」『源氏物語の宮廷文化―後宮・

雅楽・物語世界』笠間書院、二〇〇九年二月（初出：一九九〇年九月）。

(48) 注（47）に同じ、三六五～三六六頁。

(49) 倉田実「『源氏物語』の「開かれた贈答歌」」『武蔵野文学』六〇、二〇一二年一二月。

(50) 注（43）に同じ、八二頁。

(51) 阿部秋生「「召人」について」『日本文学』五―九、一九五六年九月（後に『源氏物語研究序説』第一篇 源氏物語の環境 第二章「作者の環境」（東京大学出版会、一九五九年四月）に収録）。

(52) 三田村雅子「召人のまなざしから」『源氏物語 感覚の論理』有精堂、一九九六年三月（初出：一九八六年五月）。

(53) 武者小路辰子「中将の君―源氏物語の女房観―」『源氏物語 生と死と』武蔵野書院、一九八八年一二月（初出：一九五九年一二月）。

(54) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第三巻「薄雲」一七二頁、鑑賞。

(55) 諸井彩子「〈召人〉考」『摂関期女房と文学』青簡舎、二〇一八年四月、一五三頁。

【付記】本稿は、中古文学会二〇一九年度春季大会における口頭発表を礎としています。席上等で御教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

（本学非常勤講師）